

# オーケストラ・アンサンブル金沢

2020年

4月

定期公演

Orchestra Ensemble Kanazawa  
Subscription Concert in April 2020

当公演は新型コロナウイルス感染症  
拡大防止の為、中止となりました。





## オーケストラ・アンサンブル金沢

Orchestra Ensemble Kanazawa

1988年、岩城宏之が創設音楽監督(永久名誉音楽監督)を務め、多くの外国人を含む40名からなる日本最初のプロの室内オーケストラとして石川県と金沢市が設立。JR金沢駅兼六園口に建つ石川県立音楽堂を本拠地とし、北陸、東京、大阪、名古屋での定期公演など年間約100公演を行っている。シュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭への4度の招聘など、これまで20回の海外公演を実施。設立時よりコンポーザー・イン・レジデンス(現コンポーザー・オブ・ザ・イヤー)制を実施、多くの委嘱作品を初演、CD化している。ジュニアの指導、学生との共演、邦楽との共同制作などオーケストラ育成・普及活動にも積極的に取り組んでいる。ドイツ・グラモフォン、ワーナーミュージック・ジャパン、エイベックス・クラシックスなどメジャーレーベルより90枚を超えるCDを発売。2007年より井上道義が音楽監督(～2018年3月末)を務め、18年9月よりマルク・ミンコフスキが芸術監督を務める。


オフィシャル・サイト <http://www.oek.jp/>

Orchestra Ensemble Kanazawa is one of the most active chamber orchestra in Japan, founded in 1988 by the initiative of renowned conductor Hiroyuki Iwaki, and based in Kanazawa symbolizing Japanese art, culture and tradition. OEK has over 100 concerts a year in all major cities through out Japan, and regularly performs abroad. Although programme building is based on classical repertoire, great emphasis is put on interpretation of contemporary music. Over 90 CDs are released from Japanese major label. Michiyoshi Inoue was engaged as the Music Director of the OEK in 2007 (～March 2018). In September 2018, Marc Minkowski became the Artistic Chef.

Official site ; <http://www.oek.jp/>

### コンポーザー・オブ・ザ・イヤー(2009年までコンポーザー・イン・レジデンス)

一柳 慧 (1988～1991)	藤家溪子 (1998～1999)	間宮芳生 (2005～2006)	権代敦彦 (2014～2015)
石井真木 (1988～1991 2003 4月†)	林 光 (1999～2000 2012 1月†)	新実徳英 (2006～2007)	一柳 慧 (2015～2016)
外山雄三 (1991～1992)	江村哲二 (2000～2001 2007 6月†)	一柳 慧 (2007～2008)	ティエリー・エスケシュ (2016～2017)
西村 朗 (1992～1993)	松村禎三 (2001～2002 2007 8月†)	三枝成彰 (2008～2009)	池辺晋一郎 (2017～2018)
湯浅譲二 (1993～1995)	三善 晃 (2002～2003 2013 10月†)	ロジェ・ブトリー (2009～2010 2019 9月†)	扶間美帆 (2018～2019)
武満 徹 (1995～1996 2月†)	猿谷紀郎 (2003～2004)	加古 隆 (2010～2011)	酒井健治 (2019～2020)
黛 敏郎 (1996～1997 4月†)	権代敦彦 (2004～2005)	望月 京 (2011～2012)	
池辺晋一郎 (1997～1998)	レーラ・アウエルバッハ (2004～2005)	陳 銀淑 (2012～2014)	



第428回 定期公演 フィルハーモニー・シリーズ



2020年4月23日(木) 19:00開演 石川県立音楽堂コンサートホール

The 428th Subscription Concert / Philharmonie-Serie

Thursday, 23 April 2020 at 7PM / Ishikawa Ongakudo Concert Hall

指揮 ● 田中 祐子 (OEK指揮者)  
Conductor Yuko Tanaka

主催：公益財団法人 石川県音楽文化振興事業団

助成：  文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)  
 独立行政法人 日本芸術文化振興会

  
beyond  
2020



三木 稔  
Minoru Miki

弦楽のための春 op.125-1 (1996)  
SPRING for Strings op.125-1 (1996)

藤倉 大  
Dai Fujikura

Umi (海) (2014/2017)  
Umi for Orchestra (2014 / 2017)

---

休憩 / Intermission

---

シューマン  
Robert Schumann

交響曲 第1番 変ロ長調 op.38 「春」  
Symphony No.1 in B flat major, op.38 "Spring"

第1楽章 アンダンテ・ウン・ポコ・マエストーソ – アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ  
Andante un poco maestoso – Allegro molto vivace

第2楽章 ラルゲット – アタッカ  
Larghetto – attacca

第3楽章 スケルツォ モルト・ヴィヴァーチェ  
Scherzo. Molto vivace

第4楽章 アレグロ・アニマーテ・エ・グラツィオーソ  
Allegro animato e grazioso

4  
23

指揮

## 田中 祐子

Conductor

# Yuko Tanaka

オーケストラ・アンサンブル金沢指揮者。

平成30年度五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。  
フランスのボルドー、リヨンを経て、現在パリ在住。  
エコールノルマル音楽院の指揮科・高等ディプロム  
課程にてドミニク・ルイス、ジュリアン・マスモンデ氏  
に師事しさらなる研鑽を続けている。

東京藝術大学大学院指揮科修士課程首席修了。  
東京国際コンクール「指揮」入選、ブザンソン国際  
指揮者コンクール、ショルティ国際指揮者コンクールの  
セミファイナリスト。

2013年クロアチア国立歌劇場リエカ管弦楽団に  
招かれ海外デビュー。これまでに、N響、読響を始め、  
全国各地のオーケストラと共演を重ねている。

藤原歌劇団、日本オペラ協会などの公演でオペ  
ラ指揮者としても着実に実績を重ねている。



©sajihideyasu

Yuko Tanaka serves as resident conductor of  
Orchestra Ensemble Kanazawa since April 2018.  
Awarded Gotoh memorial cultural award for the  
new talent of Opera in 2018, currently Tanaka  
lives in Paris and is studying further at École  
Normale de Musique de Paris, Alfred Cortot.

Tanaka is an up-and-coming conductor who has  
already won favorable recognition for her  
collaborations with a number of major orches-  
tras in Japan as well as opera productions. In  
January 2013, Tanaka made her European debut  
with the orchestra of the Croatian National The-  
atre.

Tanaka was accepted at the Tokyo International  
Music Competition for Conducting in 2012.  
Before that she made it to the semi-finals at the  
International Young Conductors' Competition in  
Besançon in 2009 and the International Conduc-  
tors' Competition Sir Georg Solti in 2010.

三木 稔

## 弦楽のための春 op.125-1 (1996)

20世紀後半の日本を代表する作曲家三木稔 (1930–2011) の作品といえば、なによりもまず日本の伝統楽器をフィーチャーした管弦楽曲や、日本音楽集団らでの伝統楽器アンサンブル、《春琴抄》以下の日本素材のオペラ、そしてアマチュアも愛唱する合唱曲などを思い浮かべるだろう。だが、作品番号付きだけでも150作に迫る多くの創作の中には、所謂西洋オーケストラのための作品もそれなりの数が遺されている。

伊福部昭を師に、戦後前衛とは一線を画しつつアジアや日本の響きを伝える三木の作品は世界に熱狂的な支持者を得、1994年のオーストラリアのアデレード芸術祭では8作品が演奏された。その際、《序の曲》で日本音楽集団と共演したオーストラリア室内管から新作を委嘱され、1999年の同団日本公演で初演されたのが、この10分程の楽しい弦楽合奏曲。作曲者は小品と呼ぶが、書法は精密にして繊細な巨匠芸。弦5部には細かく分割される部分もあり、コンサートマスターや首席チェロはバロック合奏協奏曲の独奏のように活躍。春の餅つきが描かれる第3部では、指定された声部の奏者が“Yoh-hoi!”と声を挙げる。

「SPRING for Stringsは、春に対する私の率直な感動の表現です。日本の春に作曲し、オーストラリアの春に初演されることを考えて、この希望に満ちた季節を対象にしました。21世紀を目前にして、今人々が望んでいるものは、美に対する素朴でのびのびとした表現のように私には思われ、ここでは20世紀風のモダンなエクリテュールに後ろ髪を引かれるということは一切

ありませんでした。(中略)この小品は、更に3つの部分に分かれ、春への期待と、春にひたる慶びの歌、そしてそれを寿ぐ餅つきのリズムでしゃんしゃんと結ばれます。」(三木 稔)

藤倉 大

Umi(海) (2014/2017)

1977年に大坂に生まれ、現在はロンドン拠点に活動する藤倉大は、器楽独奏からオペラまで様々なジャンルに、日本伝統音楽よりもロックや電子音が当たり前の環境に育った現代の感性を煌めかせる鬼才。昨年は、コンクールを巡る若きピアニスト群像を描く映画『蜜蜂と遠雷』に、課題曲されるピアノ曲《春と修羅》を提供し話題となったのをご記憶の方も多かろう。

海の形をし、コミュニケーションが不可能な異星の生命体を前にした人間を描くタルコフスキーの映画で知られるスタニスラフ・レムの傑作SF《ソラリス》を、藤倉は2014年にオペラ化した。2017年に、このオペラを素材に小編成管弦楽の為の20分程の単一楽章が編まれる。どこか人を寄せ付けない、複雑にしてメタリックな響きの彼方から、チェレスタや打楽器を含む様々な楽器が、懐かしく叙情的な旋律を次々と浮き上がらせる。

「もともと僕はメロディが書きたい、と思って子供の頃から作曲しているので、僕の中でははっきりとした旋律が常に流れています。時にはメロディとはっきり分からないかもしれないけれど。それを聴く人が、探偵のように耳をすませ、それらを見つけて頭の中で繋げていく。そうすることによって、知らない間に全く知らない世界に入り込んでいた、という空間を僕の書く音で作れたらな、と僕は思います。」

「今回のこの作品はそういう意味ではとってもわかりやすく、メロディが始終出てきます。」

そのメロディの間を、弦のトレモロがこちらに迫ってきたり、後ずさりしたりします。弦のトレモロは海の波を表し、海の波は波でも、ちょっと普通の波ではない感じ。幻想の中の海、波。心の中からのざわめきを表したかのような波がだんだんと迫ってくる。その間をうねり歩くように、複数のメロディが楽器によって演奏されます。」

「一応2楽章には分かれているものの、一つのオーケストラの曲。それなのにいろんな状況が、ぱ、ぱっと展開して進んでいきます。流れ星のような弦のオーケストラのスタッカートグリッサンドがあったり、おどけたようなコントラバスとチェロのピッチカートで、よろよろとした部分があったりもします。そのすぐ後に、室内音楽のようなパーソナルな音楽が鳴ったかと思ったら、最後に向けて、盛り上がる中、そこを朗々とチェロとホルンの旋律がうねり歩きます。」（藤倉 大）

シューマン

## 交響曲 第1番 変ロ長調 op.38「春」

ロベルト・シューマン (1810–56) は、音楽が職人の技能から作家の創作へと変貌した19世紀ロマン派時代を代表する音の芸術家だった。王族貴族や楽団、出版者からの依頼で音楽を書き、生活するのではない。大作を書いても演奏のあてなどなかった。そのためか、1840年までにシューマンが出版したのは、規模の小さなピアノ曲だけである。

そんな作曲家が交響曲に本気になった理由は、赴いたヴィーンでのシューベルト作大ハ長調交響曲の総譜再発見にあった。この失われた大作の初演と出版に尽力する中で、シューマンは交響曲への関心を高め、同年にクララと結婚するや、決然と交響曲の作曲に取りかかる。だが、翌年初めにはその楽想を破棄。あらためてこの「春の交響曲」に着手した。きっかけは、友人ベットガーの詩『汝、雲の霊よ』だったという。4つの楽章は「春の始まり」、「宵」、



「楽しい遊び」、「春の盛り」なる表題で創作されたが、奏者や聴衆には不必要と考えたか、作曲家は初演前に撤回してしまう。「春の交響曲」という題名と共に、出版譜にも表題は記されなかった。なお、「灰色のヴェールを被った雲が幸せを追い払ってしまう、春なのだからそんな雲の巡りは止めてくれ」という内容のベットガーの詩に、交響曲の表題性とは直接の繋がりはない。史上最も文学的才能に優れていたとも評されるシューマンらしい、創作に於ける言葉と音楽の微妙な関係が見て取れる逸話である。

1841年1月23日から26日の4日間で一気にスケッチを完成、3月中頃に管弦楽化終了。春を迎える同月末に初演、好評を博した。1853年の出版時に細部を改訂、以降も盛んに改訂を行ったため、複数の版が存在する指揮者泣かせの作品となっている。

第1楽章、雄渾なマエストーソで金管楽器が高らかに奏でるファンファーレ。ベットガーの詩の最終行、「谷間に春が咲き乱れる (In Thale blüht der Frühling auf!)」のドイツ語のリズムがファンファーレに転写されている。序奏から、アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェのソナタ形式主部へ。冒頭ファンファーレは姿を変えてはソナタのあちこちに登場する。ヴィオラを軸にしたような音色は地味だが、展開部で突然出現するトライアングルの響きが冒頭モットーの回帰で鳴り、コーダに至るのが印象的。

第2楽章、打楽器は登場しない優しいラルゲット、変ホ長調の歌。管楽器の主旋律に絡む弦楽器のバランスなど、指揮者の耳が問われる繊細な音楽だ。

第3楽章、フェルマータ休符を挟み前楽章からアタッカで繋がるモルト・ヴィヴァーチェ、トリオを2つ有するニ短調スケルツォ。休符とフェルマータを多く挟むコーダでは、ピアノの名人が鍵盤を操るような微妙なテンポ変化が管弦楽で再現される。

第4楽章、アレグロ・アニマート・エ・グラチオーソ。6小節のファンファーレで始まり、ソナタ形式の枠組みに自在に春の舞踏が繰り出され、猛烈なアツェルランドに至る祝祭的音楽。短い展開部の終わりには、蝶々の舞いともされるフルートのカデンツァも。